

派遣者番号	R5K14	氏名	久我 隆一
研究主題 —副主題—	「素材の文化性」と「人間関係」との関連についての一考察 —小学校器械運動領域及びボール運動領域に焦点を当てて—		
派遣先大学	東京学芸大学	指導担当者	鈴木 聡
所属	調布市立八雲台小学校	所属長	上田 義孝

キーワード：素材の文化性 人間関係 能力の差 身体的共感

要旨：本研究では、子供たちの人間関係の構築・改善につながることを期待する素材として、器械運動領域やボール運動領域の素材を選択した教師の「素材選択の理由」と「実践後に感じている手応え」について、その内実を明らかにすることを目的とした。

調査の結果、「授業研究に関する知見」として、「能力の差」を直接の学びの対象として、「他者理解」を進めながら、子供たちが互いの「間身体性」に迫っていけるような授業を構想した。「子供たちの人間関係の構築や改善」をもねらった実践ができる可能性が示唆された。「教師の成長における体育授業研究の意味に関する知見」として、「人間関係の構築・改善」をもねらって実践している教師は、「他者との関わり」や「能力の差」を強く意識して実践をしており、その実践の手応えを「子供の変容」から得ていることが分かった。

本研究で明らかとなった知見は、年間指導計画の作成における領域の配列や、授業研究における素材選択の際にいかすことができると考えられる。

「素材の文化性」と「人間関係」との関連についての一考察

—小学校器械運動領域及びボール運動領域に焦点を当てて—

M23-3871 久我 隆一

1. 研究の目的

文部科学省(2023)と東京都教育委員会(2023)の調査によれば、小学校における暴力行為の発生件数、いじめの認知件数、不登校児童数は増加傾向にある。日本の社会や教育における「競争主義」は子供たちの生活に大きな影響を及ぼしていると言え、子供たちが「生きづらさ」を抱えていることが報告されている。この子供たちの「生きづらさ」は、「他者との関わり」として学級に現れる。そのため、教師は「どのような素材を、どのように教材化して提示するか」という課題と向き合うことになる。先行研究において、これまで器械運動領域とボール運動領域の素材を用いて学習集団の形成が目指されてきたことが明らかとなっている。しかし、「どうしてその領域の素材を用いることが、人間関係の構築・改善に有効なのか」という、「素材の文化性」と「子供たちの人間関係」との関連について、その内実は明らかとなっていない。

そこで、本研究では、子供たちの人間関係の構築・改善につながることを期待する素材として、器械運動領域やボール運動領域の素材を選択した教師の「素材選択の理由」と「実践後に感じている手応え」について、その内実を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

本研究では、解釈的アプローチのひとつであるライフ・ヒストリー分析法を用いることにした。目的のサンプリングを用いて選んだ3名の小学校教師を対象とし、半構造化インタビューを実施した。調査対象の選定基準は、「①小学校に勤務し、体育科の実践を行っていた経験をもっている」「②器械運動又はボール運動領域の素材を選択した実践について、論文、本及び雑誌等に発表している」「③その論考において、子供たちの人間関係についてもふれている」とした。調査対象の詳細については、表1のとおりである。

表1. 調査対象とした教諭の基本プロフィールと二次資料

調査対象	教職年数	発表年	二次資料	文献名(略称)
N教諭	23年目	2013	・子どもとともに作る「4の2フットボール」	
		2019	・「『私たちの』バスケットボール」の創造 一対立・葛藤、そして共感・共存へ	
		2020	・「する・みる・支える・知る」を包括する「つくる」—答えなき世界を思いゆたかに生きるために	
		2022	・誰もが運動固有の面白さを味わうことを目指した「ルール学習」の検討 一小学校ゴール型ゲーム・ボール運動の学習を対象として—	
K教諭	12年目	2019	・ともに学び、ともに生きる授業	
		2020	・自分たちの最適解を見つけ出す体育授業	
		2023	・多様な他者との「よい人間関係」を大切にされた体育実践	
Y教諭	40年	1999	・みんなでみんなができるっていいね (跳び箱運動に取り組んで)	
		2007	・好きになる体育の授業	

3. 結果と考察

調査の結果、3名全員が「他者との関わり」の問題を「能力の差」が要因となっていると捉えていた。また、「能力の差」を直接の学びの対象として設定し、「解消できない『能力の差』とどのように向き合っていくか」を子供たちとともに検討するという選択をしていた。しかし、その際、選択する領域によって取り扱い方が異なっていた。

器械運動領域の素材を選択している教師は、「出来栄えや分かり具合に迫ることができる点」「技術認識を媒介として学びやすい点」「補助や動きの観察が生じやすい点」を人間関係

の構築にも関連する「素材の文化性」と捉えていた。また、「みんなができる素材の選択」「多様なでき具合の許容」「補助や動きの観察を生み出す教師の関わり」といった意図的な取組をすることで、「みんなでみんなができる」という「全員参加の保障」を意識した「異質協同の学び」の実現を目指していた。

ボール運動領域の素材を選択している教師は、『得点』という共通する目的に向かいチームが協力して『攻防』しなくてはならない点「素材となる運動の特性における『ルール』」を人間関係の構築にも関連する「素材の文化性」と捉えていた。また、教師が意図的に「素材となる運動の特性における『ルール』と学習集団における『能力の差』を踏まえたルールづくり」を授業に取り入れることを重要視していた。

選択する領域によって「能力の差」を学びの対象にする取り扱い方は異なっていたが、学びの過程に「他者理解」が生じると考えている点は共通していた。また、「他者理解ができていると教師が捉えていた『子供の姿』」として、「身体的共感」をしている姿を中心とした「子供たちが互いの間身体性に迫っている姿」に着目している点も共通していた。

ここまで述べてきた「教師の考え」を構築するに至る経緯にも、共通点が見られた。3名ともに「指導技術の向上」から「教科内容の追究」へと研究関心が変容していた。そのきっかけは、重要な他者や子供からの影響によって「自身の価値観がゆさぶられる経験」を得ていたことだった。そして、3名ともに学習感想や子供たち同士の関わりに着目し、「子供の変容」から実践の「手応え」を得ていた。

4. 成果と課題

「授業研究に関する知見」として、「能力の差」を直接の学びの対象として、「他者理解」を進めながら、子供たちが互いの「間身体性」に迫っていけるような授業を構想することで、「子供たちの人間関係の構築や改善」をもねらった実践ができる可能性が示唆された。その際、教師が「素材の文化性」を捉えられているとともに、その「素材の文化性」に合った「教師の意図的な取組」をしていかなければならないことが明らかとなった。

「教師の成長における体育授業研究の意味に関する知見」として、「人間関係の構築・改善」をもねらって実践している教師は、「他者との関わり」や「能力の差」を強く意識して実践をしており、その実践の手応えを「子供の变容」から得ていることが分かった。また、その教師の成長の過程には重要な他者や子供から「自身の価値観をゆさぶられる経験」を得ており、それをきっかけに研究関心が「指導技術の向上」から「教科内容の追究」へと変容していることも明らかとなった。

本研究で明らかとなったことは極めて事例的であり、一般化するには慎重になる必要がある。今後はさらに調査対象や調査領域を広げて研究を進めていく必要がある。

5. 成果の活用法

本研究で明らかとなった知見は、年間指導計画の作成における領域の配列や、授業研究における素材選択の際にいかすことができると考えられる。

6. 主な引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2023). 令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. pp. 8, 22, 70.
- 2) 東京都教育委員会 (2023). 令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果. pp. 5, 7, 19.